

メルロ=ポンティにおける現象への還帰

——『行動の構造』から『知覚の現象学』の序論へ——

小 熊 正 久

(哲 学)

序

メルロ=ポンティが最初の著書『行動の構造』⁽¹⁾を脱稿したのは1938年であり、それが出版されたのは1941年である。第二の著書『知覚の現象学』⁽²⁾は1945年に出版された。この間の出来事については、ジェラーツの報告⁽³⁾によれば、1939年には『国際的哲学雑誌 Revue internationale du philosophie』は、1938年4月27日に没したフッサールに捧げられた特別号⁽⁴⁾を出し、メルロ=ポンティはそれを研究した。また、1939年4月には、ルーヴァンにおいてフッサールの遺稿を閲覧した。その中には、『危機書』の未刊行部分、『イデー第二巻』の一部、『経験と判断』が含まれる。その後1944年にはトラン・デュク・タオがフッサールの遺稿の重要なコレクションをパリにもたらし、メルロ=ポンティは『知覚の現象学』の最終稿のためにそれを利用することができたとのことである。こうして、メルロ=ポンティは第二の著書執筆以前にフッサール後期の重要著作に触れることができたのである。

では内容の面で両著作の関係はどのように考えられるであろうか。このことについてはいくつかの解釈がある。

アルフォンス・ドゥ・ヴァーレンは『行動の構造』第2版によせた「両義性の哲学 Une philosophie de l'ambiguïté」という題の「序文」において、同書について次のように述べている。

「『行動の構造』は、自然的経験ではなく科学的経験の水準に位置しており、そしてこの経験そのものは（すなわち科学的探求 [特にゲシュタルト心理学と行動主義] のおかげで行動を構成していることが明らかになった事実の総体は）科学がおのずから採用している存在論的パースペクティブのなかでは理解できないものだということを、証明しようと努める」（J13/FXIII）。

このように同書では科学的経験の批判がおこなわれたのであるが、

「…自然的ないし素朴的経験の記述から明らかになるようなく参与せる意識 une conscience-engagée の概念が、科学的経験の解釈的批判によってすでに含意され、さらには課せられていたのだと結論せざるをえない」（J13/FXIII）。

そこで、結論としては、「『行動の構造』のテーゼは『知覚の現象学』のテーゼに従属している」ということになる。ドゥ・ヴァーレンによると、「それにもかかわらず『行動の構造』から読み始めるほうがよい」のだが、それは、「ある一つの歴史の描いた道がすべて行きづまりであったという理由を体得したほうがよい」からである。その袋小路と対照的に『知覚の現象学』の描く経験の正当性がきわだつというわけである。これに対してわれわれは、この解釈においては、「統合」と「構造」という『行動の構造』独自の思想が正しく評価されていないのではないかという疑問をもつ。

上で言及したジェラーツは別の解釈をする。ジェラーツは、おおざっぱに言えば、『行動の構造』の前半部では「外的見方」がとられ、それは後半部において「内的見方」に取って代わられるが、その際メルロ=ポンティはカント的な超越論的哲学に賛同するわけではなく、どのような超越論的哲学をみずからの立場とすべきか迷っていたとする。そして、『行動の構造』執筆後に後期フッサールの著作と出会うことによって展望が開かれ、『行動の構造』の立場から前進することができたというのである⁽⁵⁾。たしかに『知覚の現象学』には、自己の身体との与えられ方、「生活世界」や「時間意識」の記述などに関して、後期フッサールの色濃い影響が無数に見られる。だが、ジェラーツの解釈では、メルロ=ポンティの立場の移行面が強調され、『行動の構造』の思想の価値と『知覚の現象学』におけるその思想の持続の面が隠れてしまっているように思われる。われわれは、『行動の構造』において生理学や心理学の成果の検討として獲得された「統合」および「構造」の思想は積極的価値をもち、それは『知覚の現象学』の中にも生かされており、また、『行動の構造』末尾の方法論的模索や『知覚の現象学』における「現象学」解釈もその『行動の構造』の中心的思想を含む形で構想されたものと考え⁽⁶⁾。

本論では、以上の観点から両著作の関連部分を検討し、それらの関係を考察することにしよう。最初に『行動の構造』の根本思想である「統合」と「構造」の概念を概観したのち、同書最終部における方法論的考察の有様を検討する。次に、『知覚の現象学』序論(introduction)の「現象への還帰」の説明を検討しながら前者の根本思想がそこでどのように生かされているかを見ていくことにする。

§1 「統合」と「構造」の概念

『行動の構造』における中心思想をなすと考えられる「統合」と「構造」の概念を概観しておくことにしよう⁽⁷⁾。

視野に物が現れるときには、ゲシュタルト心理学が教えたように、〈図と地〉という全体的構

造において或る形態が現れる。こうした知覚に対応する神経系のことを考えてみる。おおざっぱに言えば、視野のそれぞれの場所には解剖学的に網膜上の区画が対応し、その各区画から神経が中枢部へと接続されている。だが、〈図と地〉という体制によって或る形態を知覚するということから、網膜の各区画から中枢にいたる各神経はなんらかの仕方でも相互に関係をもつということが予想され、メルロ=ポンティによれば、そのことは確認されうる。これを『行動の構造』の用語で言い直せば、神経系にかんして「水平の局在」と「垂直の局在」——すなわち〈諸刺激の空間的広がりに対応する周辺部での局在〉と〈特徴把握の諸機能の中枢部での局在〉——が相互に関連しつつ働く（交錯する）ということになる⁽⁸⁾。そのことと〈現象の場での形態の知覚〉は対応し合うのである⁽⁹⁾。また中枢部の或る箇所でも損傷が起こるならば、それが特徴把握における一定の機能の障害となってあらわれる、という対応もある。このようにして神経系において諸部分に関連しつつ機能することが、身体の諸機能の「統合」ないし「構造（化）」と呼ばれる。

以上が「統合」ないし「構造（化）」の概念であるが、これに即して『行動の構造』における「構造」という語のさまざまな意味合いを整理してみると、それは、物の現出における〈図と地〉のような体制を表すためにも、また、身体ないし神経系における機能の「統合」を表すためにも、また、環境に対する「行動」においてこの両者が対応しあっていることを表すためにも使われている⁽¹⁰⁾。

以上、視覚にかんする事柄をみてきたが、同様の事態は、感覚相互の協働、また、身体各部の行動における協働、知覚と行動の協働などにも妥当する。

ところで、こうした「構造」は生体と環境との関わりとしての「行動」の基本的な働きを表す概念である。そして、生体と環境の関わり方は生物の種によって異なっている。そうした観点から行動を分類したものが、『行動の構造』第二章第三節に見られる「癒合的形態」、「可換的形態」、「象徴的形態」という分類である。メルロ=ポンティはこれらを先ほどの「統合」という概念を使って、「統合度」の違いとして捉えている。「統合度」とは、或る生体の分化した諸機能が環境に対して統合的に働く度合いのことである。「癒合的形態」の行動は環境の一定の刺激に対して一定の決まり切った反応をする行動、「可換的形態」は環境の変化に対して行動を変化させることができる（学習できる）行動形態、「象徴的形態」は環境の意味を把握したり表現できる行動形態であり、それらの形態は生体の身体的活動の「統合度」に対応している、ということになる。

以上のように「統合」と「構造（化）」は『行動の構造』におけるあらゆる箇所に関連する中心概念である。もう一度「可換的形態の行動」を「構造」という言葉を使って言い直せば、それは、環境の構造の変化にあわせて自らの行動を変化させることができる行動だということになるし、「象徴的形態」の行動は環境の構造を把握しつつ行動によってその構造を表現す

ることができる行動だということになる。

次に、こうした「構造」の「認識」について考えてみると、生体の行動の中に「意味」や「構造」を見いだすのは「われわれ」である。たとえば、神経系や大脳の中に「統合」ないし「構造」を見いだされるとすると、それは、行動の場面で現れる生体の正常な機能あるいは機能障害と対比することによってはじめて可能なのである。また、生物ではない自然の中に構造を見いだすのもわれわれの科学的作業による（『行動の構造』第三章参照）。そのように見ると、構造を見出すのは「意識」であるとも言える。かくして、世界の「自然」、「生命」、「人間」といった領域に構造を見いだす意識は、「普遍的場としての意識」(①)と見なされ、その意識は「無条件的反省」によって「構造」を見いだすのだ、という批判主義的な現象学的見方が生じてくる。しかしながら、われわれの意識も、「統合度」のもっとも高い段階に位置してはいるが、統合度の違いに応じた生体と環境の関わり方であるところの様々な(段階の)弁証法に根ざした意識すなわち「知覚的意識」(②)であるという側面をもつ。

そこで、存在と認識に関する次のような根本問題が生じてくる。意識は身体的機能の「統合」によって成立しうるとすれば、無条件的反省を行う「普遍的場としての意識」の存在は幻想ではないか。しかし逆に、「知覚的意識」そのものの有様を解明するためには「無条件的反省」が要請されるのではないか。この問題をめぐって、『行動の構造』最終章【心身の関係と知覚的意識の問題】は、デカルト以来の哲学史をふまえつつ、二つの意識(①と②)のどちらに即した立場をとるべきかを考察しているのである。そして、この問題は同時に、哲学的方法の選択の問題でもある。

§2 批判主義と現象学

前節でみた問題を受けてメルロ=ポンティは、『行動の構造』最終章最終部において、みずからの認識の方法として何を選ぶべきかという方法論的問題を考察している。重要な候補である「批判主義」と「現象学」という二つの「超越論的哲学」に言及している箇所を追いながら、彼が二つの立場をどう考えているかをみてみよう。

【批判主義の考え方——知覚の主知主義的理論によって解答された心身関係の問題】と題された第4章第1節第5項において、カント流の批判主義による「知覚」の解釈が紹介されている。それによれば、

「[知覚により]認識するということは、つねに或る与件を、…それが私にとって意味をもち、しかじかの構造を呈示する“かぎりにおいて”、把握することである」。

このように知覚主体の意味理解が不可欠のものとみなされ、また、知覚を、

「感覚的機構や記憶の機構など、多数の因果系列の合流点に位置づけることによって、

自然の「出来事」として説明することはできないのである」(J295/F214)

として、知覚を主観が能動的に対象の諸特徴を構成する思考とみなす。そして、認識対象のほうは、たんなる「見かけ」ではないが主観と関連しつつ堅固な構造を具えているという意味で「現象」と呼ばれる。

以上の紹介のあと、『行動の構造』で初めて「現象学」という用語が使われる。

「哲学は、この現象という主題を守る限り、現象学、すなわち宇宙の場としての意識の財産目録となるはずである」(J297/F215)。

こうして「現象学」は現象としての全対象の意味を把握する学問とみなされているのであるが、ここでは、「現象学」が「宇宙の場としての意識の財産目録」という形で定義され、それが「批判主義の考え方」という項目のもとであつかわれていることが目をひく。ここでの「現象学」の説明はフッサールの『イデー第一巻』⁽¹¹⁾などにおける現象学の構想に従うものであるゆえに、上の定義はさほど無理なものではない。だが、「現象学」という語が「批判主義の考え方」という項で、しかも特に説明もなく使われていることをみると、メルロ=ポンティはこの箇所では「現象学」と「批判主義的哲学」を同一視しているようにも思われる。たしかに、上でみたように、知覚を因果関係として理解することを拒否する点や「現象」の解釈を取り上げてみると両者に似た点が多い。しかし、ここでメルロ=ポンティが両者を同一視していると断定することはできない。そもそも、メルロ=ポンティは『行動の構造』では「現象学」について表だってはほとんど論じていないからである。

そこでわれわれは、一旦、〈メルロ=ポンティ自身の立場（これは確立されているわけではないが）〉と〈批判主義〉そして〈現象学〉という三つの立場を区別した上で、さらにテキストにしたがって、先程の箇所に限定せずに、しかも推測的にではあるが、相互の関係を考えてみよう。次の箇所をみると、彼は自分の立場を批判主義と同一視しているわけではないことがわかる。

「だがかかる“宇宙の場”としての絶対的意識という観点からは批判主義のばあいと同様、心身関係の問題は解消してしまうように思われる」(J301/F218)。

メルロ=ポンティは「心身関係の問題が解消してしまう」ということは実際の現象に即していないと考えるのであるが、上の文は、自分が「…絶対的意識という観点をとるなら…」という意味の発言とみなしうるであろうから、自分が批判主義をとることを肯定的に考えてはいないと思われる。次に、「現象学」の立場を表す「宇宙の場としての絶対的意識という観点」については、「批判主義の場合と同様…」と言われていることから、「現象学」がそのまま「批判主義」そのものを指すのではないと思われる。以上から、〈メルロ=ポンティの立場〉と〈現象学〉は、〈批判主義〉とは異なることになる。このことはさらに、【しかし、われわれの結論は批判主義的なものではない】と題された項の、次の箇所を参照することによって確認さ

れるであろう。

「…われわれは超越論的態度に到達した。…が、それだけが唯一の結論ではないし、この最初の結論は、批判主義的発想の哲学とは、単なる同音異義の関係にあるとさえ言うべきであろう」（J307/F222-3）。

すなわち、自分の立場は超越論的哲学といってもよいが、批判主義ではないというわけである⁽¹²⁾。

では現象学と〈メルロ=ポンティの立場〉の関係はどう捉えるべきであろうか。「宇宙の場としての意識の財産目録」としての「現象学」について懐疑的であることは先にみたとおりであるが、「現象学」についてのもう一つの言及箇所を見てみよう。

「われわれはこの章〔第4章〕の冒頭で分析した素朴的意識の与件に戻ってきたことになる。と言っても、生活の中ですでに、知覚の哲学は完成しているというわけではない。さきほど見たように、意識はまさに物の意識であるため、おのれ自身を忘れてるのが自然だからである」（J326/F236）。

意識の本性上、素朴的意識に戻るだけではそれを把握することにはならないというわけである。そこで、

「実在の世界がその特殊性のままに構成される根源的経験の一つの典型としての知覚に立ち返るためには、意識の自然的運動を逆転させることが必要となる」（J326/F236-7）。

かくして「意識の自然的運動の逆転」の必要性が語られたわけだが、この箇所には以下の留目すべき注が付けられている。

「われわれは、ここで、フッサールの晩年の哲学が与えているような意味での『現象学的還元』を定義しているのである」と。

つまり、知覚に立ち返るためには一種の「現象学的還元」が必要であると言われているのである。だが、これは注であるということを考慮すれば、メルロ=ポンティは「現象学」を自らの立場とすると明言しているわけではない。「現象学」に対してメルロ=ポンティはきわめて慎重なのである。とはいえ、この注においてわざわざ「フッサールの晩年の」と限定を加えていることにより、「宇宙の場としての意識の財産目録」とは一線を画する「現象学」のことが考えられていたのではないかと思われる。

さて、『行動の構造』最終頁では、批判主義的理論が認められない場合という条件つきで、「超越論的哲学を新たに定義しなおして、現実的なものの現象をも統合するようにしなければならなくなるだろう」（J333/F241）

と語られている。上の注の内容をも顧慮すると、新しい超越論的哲学の可能性として「現象学」のことが念頭にあったのかもしれないが、やはり明言は避けられている。

『行動の構造』の最終部で方法的立場について行われた考察は以上で終わっている。だが、同じ最終部では方法論との関連で、「その知覚の問題は構造と意味の観念の二重性にある」と言われている。超越論的哲学に統合されるべき「現実的なものの現象」の含意を明らかにするために、この二重性の問題を追ってみよう。上の文の直後に「『図と地』の構造のようなゲシュタルト」は、「一つの意味を持ち…一つの全体である」と言われている。ここから、「ゲシュタルト」は「構造」ないし「意味」と呼ばれうる事が確認される。次に、「だがこれは一つの観念ではない」と言われている。その理由は、「われわれの前で組み立てられ、変化し、再組織されるような」全体としてのゲシュタルトは「生きられるパースペクティブの偶然性」をはらむ、ということである。それに続いて、「大脳活動の水平的局在、動物の行動や病的行動の癒着的構造は、その〔偶然性の〕顕著な例にすぎない」とされ、『『構造』は自然主義と実在論の哲学的真理である」と語られている。この箇所から、「生きられるパースペクティブの偶然性」に関連する事柄が「構造」と称されている、と考えることができる。以上をまとめると、ゲシュタルトのような「構造」ないし「意味」は「観念」ともく偶然性に関連することとしての「構造」も解される可能性があり、そのことが、これらの概念の「二重性」ということになろう。そして、構造をはらむ意識としての「知覚的意識」を「その独自の在り方を損なわずに理解すること」がメルロ=ポンティのめざすところであり、それが、「現実的なものの現象を統合すること」でもあるだろう。

最後に、上の二重性の一方をなす「構造」について、少し前の箇所を参照しておこう。

「われわれの出発点となった『ゲシュタルト』というものの中で深い意味を持っているのは〈意味〉という観念よりも、むしろ〈構造〉という観念である。つまり理念と存在との見分けがたい〈合体〉、素材がわれわれの面前で意味を持ち始めるような〈素材の偶発的配列〉…なのである」(J307/F223)。

ここでも、「構造」は偶然性に関連するものと捉えられているが、さらに、この文脈ではそうした「構造」は「神経全体にささえられていて、各瞬間に描かれ、自己自身を組織化する過程以外の何ものでもない」「機能」(J307/F223)と等価のものと扱われており、それはまた、小論§1でみた「大脳における水平的局在と垂直的局在の交錯」と同じことであると解されている(J308/F223)。つまり、ゲシュタルトのような「構造」の源は、脳や身体の諸機能の統合をも表す意味での「構造」、すなわち、小論§1での二番目の意味をも包括する「構造」にはかならない。そしてこれは三番目の意味での「構造」といえるであろう。

こうしてみれば、メルロ=ポンティが最終頁で語っている目標は、総括的な意味での「構造」を取り入れる形で「超越論的哲学を定義し直す」ということになるであろう。『行動の構造』最終部では、彼の求める「超越論的哲学」はまだ具体的に姿を現してはいるが、メルロ=ポンティのめざす方向は定まっていると考えられる。

§3 『知覚の現象学』における「現象への還帰」。感覚と意味

1945年に『知覚の現象学』が出版された。この書物の主題は、「見えるとはどういうことか」ということである。このような問いかけは荒唐無稽なものにおもわれるかもしれない。「どうして物が見えるのか」という問いに答えることも困難であるに違いない。だが、こちらの問いは、見えるという事実を成立させている原因ないし理由を説明する課題と受け取れば、その意味は一応理解しうる。それに対して「見えるとはどういうことか」という問いは、単に事実について問うているようにおもわれる。しかも、これはほとんど自明の事実のように思われる。だが、この問いが意味をもつのだとすれば、自明であると思われている知覚についての解釈が誤っているということも考えられる。そうすると、メルロ=ポンティは『知覚の現象学』では、知覚の解釈の誤りを正して知覚の真相をあらわにしようとしているということになるであろう。まさしく、その「序論 (introduction)」【古典的偏見と現象への還帰】は、知覚についての誤解を除こうとしているのである。序論の各節には【「感覚 (sensation)」】、【「連合」および「追憶の投射」】、【「注意」および「判断」】、【現象野】という表題がつけられており、最後以外の各項目はあたかも現象学の手続きに従って「判断中止」されるべき項目をあらわすように、括弧が付されている。最後の「現象野」こそ、誤解を取り除いたうえで『知覚の現象学』が考察すべき領野である。「序論」で示されているメルロ=ポンティの現象学理解をみながら、『行動の構造』最終部の考察がいかなる形で受け継がれているかを考えよう。

われわれは、視野とは、あたかも絵画のようにそれぞれの場所に種々の色が塗られていて、少なくとも暫時は、場所や色は不変である面のようなであると想像することがある。しかし実は、そう考えられるのは視野の中に見える〈対象そのもの〉のことである。視野の各部分には空間的な図と地の関係、内容面でのコントラスト、遠近、身体、周辺部での歪み、注意を引きつけるもの、眼をそらしたくなるもの、不断の移り変わりなどが存在する。たとえばある赤に注目するだけで、視野の構造は劇的に変化する。一瞬の状態、一つの区画のみをいわばスナップ写真のごとくに切り出せると考えるのは幻想にすぎない。また同じ赤といっても、絨毯にあたる光のたわむれや絨毯の毛羽立ちと無関係ではない。視野の場所や色はきわめて不安定なのである。

【「感覚」】の節では、感覚についての幾つかの先入見がそれぞれ「感覚」を定義する試みの形で吟味されている。最初は、意味づけられたり関係づけられたりする以前の与件として想定される「私が触発される仕方」ないし「純粹印象」としての「感覚」である。これに対しては、「地の上の図がわれわれの獲得しうる最も単純な感覚的所与」(J30/F10)であり、そ

れなしでは或る現象は「知覚的現象」とはよべない、といわれている。たしかに、背景から浮き上がってこないような「純粹印象」は、「知覚不可能であり、知覚の契機としては考えられない」ことであろう。なお、図と地のような体制はここでは「知覚の構造」とよばれており、『行動の構造』最終頁を思い起こさせる。

次に、感覚することは「色や光をもつこと」、「音を持つこと」、一般に「諸性質をもつことである」(F10/J31) という定義が吟味されている。これに対しては、感覚的「性質 *qualité*」なるものも意識の一要素ではなく、「視野の中に現れる物の特徴 (*propriété de l'objet*)」であり、そうである以上、「そこに住み着いている意味」(J32/F11)なしに赤そのものを取り出すことは不可能である」と述べられている。或る性質は、全体の光の具合、物の表面の材質、場所的配置、他の色とのコントラストなどの中で知覚される以上、その性質を変えないでそれだけ取り出すということはできないのである。

さらに、メルロ=ポンティは視野について、例えば有名な二つの線分にかんするミュラー=リアーの錯視図において、「二つの直線部分はほんとうは同等でも不等でもない」、二つの直線部分は「それぞれ別個のコンテクストの中で捉えられているからだ」(J34/F12) と言っている。このように「視野」は曖昧さや相矛盾する概念が交叉する独特の場だというのである。たしかに、視野は曖昧であり、ぼんやりしたところの方が多いほどである。錯視図のなかの二つの線分を何かの手段で正確に比較しようとしたり、あるいは周辺部にぼんやりみえていたものを目を凝らして見るような場合には、もはや、視野の体制全体が変わっているのである。ところがわれわれは、世界は客観的・一義的に規定されているという先入見から、視野内の色や線分の長さは客観的に規定可能であると思ひこみやすいのである。

さて、「序論」に即していえば、メルロ=ポンティの考える「現象学的還元」は視野などの「現象野」への還元と言えそうである。もしそうだとすると、それは、フッサールが『イデーン第一巻』で定式化した「現象学的還元」と比較すると、相当の隔たりがある。フッサールによれば、「現象学的還元」によって、「超越的な存在者」の定立を「作用の外に」置いたのちにも残余する「純粹意識」の要素は、「感覚諸内容」と「意味付与的体験」などである。こうした諸要素からいかにして諸対象の客観的統一が成立するかを考察するのが「現象学的構成」の作業である⁽¹³⁾。ところが、メルロ=ポンティの所論によれば、「感覚諸内容」はすでに「意味」をもっているのであるし、「現象とは一つの意識状態ではない」(J111/F70) のである。だがいったい、メルロ=ポンティにいう「現象野」とは何か。これについては「意味」の問題をみてから考えることにしよう。

次の【刺激の直接的帰結としての感覚】の項では生理学的に感覚を定義しようとする試みが吟味され、さらに、心理学と生理学の関連が述べられている。ここは、『行動の構造』との関連をみるうえで重要な箇所である。その定義の出発点は、「感じるもの *le sensible*」を「そ

れが依存している客観的条件によって限定する常識」である。「見えるものとは目でもって捉えられるものごとであり、感じるものとは感官によって捉えられるものである」というわけである。そして、身体は多様な現れ方をするが、一つの様態としては他の物体と同様に〈延長をもつもの〉として現れる。それに応じて古典的生理学は身体を「延長の断片」として扱う。

その結果、「『行動』は反射によって」説明され、「刺激の加工と形態化は神経機能の縦走的理論によって」説明されることになる。この「縦走的理論」とは、「受容器から一定の伝達器を経由して…特殊化されている記録所にいたる解剖学的経路を認める」(J36/F13)という考えのことである。こうして、「刺激と基本的知覚のあいだの点的[一対一]対応と恒常的連結」を意味する「恒常性仮説」(J36/F14)が前提されることになる。

しかし実際には、物理的刺戟と感覚は一対一に対応するわけではない。先にみたように、感覚は視野内のさまざまなものと関係した「意味」を含んでいるからである。また、感覚器官や神経組織は単に伝達器の役割を果たすものとみなすことはできない。「部分的刺激相互の協働」や「感覚系と運動系の協働」などが不断に生じているのである。また、視覚機能の崩壊も、「まず最初に一切の色彩が冒され、その飽和度が消失する。スペクトルが単純化され、四色に減少し、まもなく二色に減少する。そしてついには一つの灰色の単色にまで行き着く」という経過をたどる。つまり、「神経実質の喪失の結果生ずるものは、単に幾つかの性質の欠落ではなく、より未分化でより原始的な構造への移行なのである」。また崩壊とは逆に、「正常の機能は統合の過程として理解されるべきであり、そこでは外的世界のテキストは複写されるのではなくて構成されるのである」(J38/F16)。ここで重要なのは、知覚は小論§1でみたような「統合」として働くが、その知覚は、「縦走的理論」や「恒常性仮説」で想定されているように客観的性質の複写ではないということである。

そして、この「統合」という観点から、メルロ=ポンティは心理学と生理学の関係を、「もはや二つの並立した科学ではなくて、おなじ行動の二つの規定であって、ただ、前者は具体的、後者は抽象的だというにすぎない」(J39/F16-17)と捉えなおしている。この箇所は、『行動の構造』における考察の成果を前提しているのであり、『行動の構造』中の該当箇所を参照すると、二つの科学は、「要素ないし内容の並行論」としてではなく、「機能的ないし構造的並行論」として把握すべきであると主張されている。

「意識の生活と有機体の生活は、互いに外的な無数の出来事からなるのではなくて、心理学と生理学はいずれも、行動の組織化の様式と統合の程度を求め、前者はそれを記述し、後者はその物質的基体を指定しようとする」(SC.J123/F83)。

このことが認められるならば、心理学的出来事と生理学的出来事はそれぞれ要素的に一対一対応をしているのではないことになるであろう。さきの視覚機能崩壊における色の事例で見

られるとおりである。

このように、「恒常性仮説」や「縦走的理論」とそれに含まれる先入見は、事象を正しく見るためには妨害となる。そこで、「諸現象を認め、この仮説の真偽を判断するためにも、まずわれわれはこの仮説を「中止させておく」ことが必要である」(J40注(10)/F15)、また、「生理学者も即自的な外的世界という理念を批判することを学ぶべきである」(J36/F17)と言われている。けれどもこれは、生理学的考察が一般に現象の研究を妨害するということを意味するのではない。もし生理学の中に「恒常性仮説」やそれにしたがう「心身並行論」、「神経の縦走的理論」しか存在しないとすれば、そうした生理学は「現象学的還元」の対象となるであろう。だが、生理学の中で知覚の諸様態の「協働」や「統合」が考察されるならば、それらは心的現象や身体的現象を見直す重要な手がかりになるはずである。『知覚の現象学』においては、『行動の構造』のように生理学的考察が多くの部分を占めていないけれども、前者は後者の成果である「構造」や「統合」の思想を重要な前提として利用しており、それは、「恒常性仮説」を括弧に入れる根拠になるとともに、一般に「現象学的還元」を準備し、さらに、「延長の断片」としての身体観を捨てて新しい身体観を創造するために役立てられていたのである。こうして「現象学的還元」を生理学にも関連する操作とみなせば、新しい生理学は単に先入見を括弧に入れるだけではなくて、現象野の新しい解釈、身体や心理の新しい見方をも提供する手引きともなるのである。

以上ではおもに「感覚」が考察の対象となっていたが、次の【「連合」と「記憶の投射」】の節では、〈視野に存する意味〉が問題になる。純粋な質としての「感覚」の存在を容認してしまうと、「全体のそれぞれの諸部分…は、色彩や諸性質のほかに特定の意味というものをもっている」ことになる。そうすると、「この意味が何によってつくられているか、縁とか輪郭とかという言葉は何を意味するのか、諸性質の全体が地の上の図として把握されるということはどういうことなのか」(F20/J45)が問題になってくる。ところが、そうすると、「感覚されるものの意味はもはや、現前ないし潜在する他の諸感覚からなるしかない」。たとえば、一つの円上の「弧ABは[同じ長さで隣り合った]弧BCに似ているが、その類似はただ実際に一つの事実が他の事実を考えさせるという意味に他ならない」ということになる。こうして、「一方の印象が他方の印象を呼び出す」という「連合」の作用が「意味」を形成すると考えられるにいたる。「連合」と同様のことは、現在の知覚を補完する「追憶」についても妥当する。たとえば、以前に見たことの或る形を知覚された絵のなかに見いだすような場合である。これらに対してメルロ=ポンティは、そうした「連合」や「追憶」を利用するには知覚の中にその手がかりが必要になると反論する。あらかじめ知覚の中で或る形をなんらか見て取っていなければ以前に見たことの「追憶」を利用することもできないわけである(J54/F27参照)。

次に、【「注意」と「判断」】の節では、まず、「注意」という概念が検討されている。ミュラー=リアーの錯視図において客観的には等しいはずの2本の線分の等しさに気づかないような場合に「注意」が足りなかったからだと解されたり、皿の円い相貌のなかに幾何学的円を見いだす場合、意識があらかじめ指定されていた円を「注意」が見いだしたというような解釈がされた。しかし、注意についての新しい理解も生まれてきている。

「注意とは、…今までは単に未決定な地平のかたちでしか提供されていなかったものを顕在化し主題化するような、新しい対象の積極的な構成なのである」（J70/F38）といった理解である。メルロ=ポンティはこうした理解に従い、「注意」とは思惟の自己への還帰ということなどではなく視野全体の変様だと解するのである。

さらに、【判断と反省的分析】（J72/F40）の項においてメルロ=ポンティは、「主知主義 intellectualism」による知覚の分析に対して批判をおこなう。「主知主義」は知覚の構造を「連合」や「注意」によって説明するのではないが、「判断」を、「知覚を可能にするために感覚には欠けているもの」として導入する。つまり、「意味」の部分は「判断」によって補われると解釈するのである。そうするとたとえば、[二本の平行線のおのおのに向きの異なる短い斜線が数多く被せられている]ツェルナーの錯視図のような場合、その知覚を、「われわれは誤って“主線は平行でない”と“判断する”のだ」と説明することになる。「感覚」と「判断」とは分離され事柄として扱われるのである。しかし、「平行でない」という二本の主線の意味は「その図形に付着して」、そのままでは平行には見えないのである。こうして、彼は知覚を「感覚」と「判断」に分けることはできず、いわば知覚には意味が内在しているとする。そしてメルロ=ポンティは、このような内容間の意味的関係を「動機づけ motivation」の関係と呼び、「原因・結果」の関係からも「理由・帰結」の関係からも区別する。もう一つの例をみておけば、

「私と私によって凝視されている対象のあいだに介在する諸物体」は、そのあいだの外見上の距離の知覚に対して、「原因 cause が結果 effet に働きかけるようには」働きかけず、また、そこには客観的論理つまり理由 raison の関係があるのでもないが、そこには、「介在している諸物体はこの自然的テキストのなかでより大きい距離を語ろうと欲している」という「動機 motif」の関係が存するのである（J98/F60）。

なお、この「動機づけ」は、『行動の構造』では「生きられる関係」（SC.J327/F237）と呼ばれていた関係にほかならない。

さて、最後にメルロ=ポンティは、小論§2でみた「宇宙の場としての意識」に相当する「絶対的主観」（J84/F49）の想定を批判をする。

「私はどこに自分がいるかを知り、自分が諸物のただなかにいることをみずから見ているからには、私は一つの意識であるはずであり、どこにも駐在することなくしかも

志向としてはいたるところに自分を現前させるような独特な存在であるはずである」(J82/F47)。

このような推測を契機として、どこにも存在せず一切を対象とするような「絶対的主観」を想定する哲学が生じうる。けれども、この「主観」自体はすべての内容を対象とする「無」であるから、実は、この立場は、主観の役割をまったく度外視する実在論的な見方とほとんど区別がつかない。しかもこうした哲学は、

「同一主観が世界の一部であると同時に世界の原理でもあるのはどうしてであるかは、一度も問う必要はなく」、「反省は確認という性格を失ってしまって、…現象を記述することなぞ問題ではありえなくなる」(J87/F51) のである。

けれども本当は、省察する自我といえども、すべてのものを「一つの特定の展望のもとで」知覚をせざるをえないし、

「いかに反省しようと、私は霧のかかった日に二百歩前のところに太陽を見たり、太陽が“昇ったり”、“沈んだり”するのを見ざるをえない」(J117F75)。

こうした「錯覚」をもちうるような状況内存在が、「私」の存在なのである。

§ 4 現象野と現象学的還元

以上の「客観的世界の先入見」や「恒常性仮説」、「経験論」や「主知主義」による知覚の理論、「絶対的意識」の批判を行ったあとで、メルロ=ポンティは還帰すべき「現象野」について述べる。では「現象野」とは何か。以上のことを念頭において考えると、それは見えるがままの風景である。だが、それをわざわざ「現象野」と呼ぶ必要はあるのだろうか。

たしかに、「現象野」は見えるがままの風景、感じられるままの広がりであると言ってよいであろうが、「客観的世界の先入見」を取り除いた風景、広がりなのである。換言すれば、錯覚や曖昧さ、不明瞭、歪みに満ち、内容相互から「動機づけられた」意味が生まれてくる風景、他人は〈延長としての外見〉と〈原理上不可知の心〉からなるはずだとする先入見が除かれ、他人の心が「一つの内在的意味に浸透された総体としての直接的対象となる」風景、私の心の動きも「私の行動の分節化、旋律的統一として」与えられる風景である (J112/F72-73)。

考えてみれば、「他人」や「社会」にしろ、「空間」や「時間」にしろ、われわれが「客観的なもの」としてそれらの概念に付与しているイメージは必ずしも根拠のあるものではない。メルロ=ポンティのいう「現象学」が行なおうとしていることは、通用していた客観的規定を括弧に入れたあとで構成をおこない、再び以前の客観的規定を再構成してみせることではなく、「現象野」を考察することによりそうした規定を造り直すことである。そこでメルロ=ポ

ンティは、「現象学」を、「非反省的なものの事実性にみずから与る一つの創造的作業だ」(J117/F74) と言うのである。またそうすると、「現象野」の考察は無限の作業であることになり、「序文 (AVANT-PROPOS)」で述べられているように、「現象学的還元」について「還元の最も偉大な教訓とは、完全な還元は不可能だということである」(J13/FVIII) という逆説的な把握も生じてくるのである。

最後に「身体」についての生理学・心理学的考察の意義という観点から『行動の構造』との関連を見ておこう。身体についてはもちろん、「自己の身体の特徴の現前」, 「二重感覚」, 「運動感覚」といったフッサールの『イデーン第二巻』に見られ、メルロ=ポンティの『知覚の現象学』第一部【II 身体の経験と古典的心理学】にも受け継がれているような身体経験の記述も重要であり、それによって「単なる延長の断片」としての身体観は見直されることになるが、さらに、生理学的・心理学的与件の検討は、感覚器官、神経系、脳についての新しい見方を要請する。両者を対応させることによってこそ新しい身体観が形成されるであろう。しかも、最も重要なことは、『行動の構造』で主張されていたように、生理学・心理学的与件は「現象野での身体経験」と対応させなければ解釈できないということである。生理学的・心理学的考察は、〈自己の身体経験〉と〈外側から見られた身体〉のいわば必然的媒介となるのである。こうして、生理学・心理学全体を還元するのではなくて、それらのなかの（恒常性仮説といった）「客観的世界の先入見」を還元する必要があるとメルロ=ポンティは主張するのである。その作業を欠くならば、「身体」は再び生理学的には「延長の断片」とみなされ続け、生理的事象と心理的事象は一対一の要素的並行関係におかれ、「超越論的意識」がそれらの事象を対象とするという形の「超越論的哲学」にとどまることになる。これはフッサールの『イデーン第一巻』の時期に見られる「現象学」の構想であり、メルロ=ポンティが否定的に「超越論的哲学のふつうの見通し」(J116/F73) といっていたものである。こうした構想を打破する「現象学」を形成することになった背景には、『行動の構造』における「構造」概念と方法論的模索があると考えざるをえない。以上のことを表している文を『知覚の現象学』第1部【I 対象としての身体、および機械論的生理学】から引いておこう。

「人間はその自発性の一部を放棄することによって、安定化した諸器官や既成の諸回路をつうじて世界の中に参加することによってこそ、心的並びに実践的な空間を獲得できるのであり、この空間が人間をその環境から原理的に離脱せしめて、彼にその環境を見るようにさせるであろう。…みずからに習慣的身体をあたえることは、最も統合された実存にとっての内的必然性なのである」(J156/F103)。

* * *

ジェラーツはその書の結論部で次のように述べている。

「この[メルロ=ポンティの思想の]成熟は躊躇や暗中模索なしで行われたのではない。そして、われわれがこの書で確めたところでは、1939年に重要な敷居がまたがれたのである。だがそれは、“おもな”影響の源が変化しただけではなくて、フッサールという同じ哲学者のなかに、古典的超越論的哲学の袋小路をこえて何か別なものをもたらす道が開かれているのを発見したからである」⁽¹⁴⁾。

これに続いてジェラーツは「敷居をまたぐ」きっかけとなったと思われるフッサールの著作に言及している。それは、『危機書』の一部としての『幾何学の起源について』、『経験と判断』、『イデア第二巻』などである。たしかに、こうしたフッサールおよび現象学関係の書物の研究を考慮することなしには、その後のメルロ=ポンティの哲学を思い浮かべることさえできない。彼の「知覚的信念」や「生活世界」の概念、「自己の身体の現象学的記述」などはフッサールの著作や遺稿の研究なしには考えられないのである。しかしながら、『行動の構造』末尾における「現象学」に対する躊躇がなければ『知覚の現象学』における「現象学的還元」の解釈は生じなかったであろう。『行動の構造』最終部の方法論的考察において目指された方向に合致するものとして「現象学」が採用された。しかし、その「現象学」はフッサールのプログラムにそのまま従うものではなかった。彼の方法的模索の源であった「構造」と「構造の認識」の緊張関係はフッサールの読書によって解消されたのではなく、それは先にみたような独自の「現象学的還元」の解釈となって現れている。また、心理学・生理学についての『行動の構造』の見方は『知覚の現象学』においてもほぼそのまま受け継がれ、メルロ=ポンティの「現象学」解釈の不可分の一部となっていた。メルロ=ポンティの哲学全体を考察するためには、また、彼の哲学の可能性を再認識するためには、変化だけでなく変化の底にある面を熟視することも必要であろう。

『行動の構造』において企てられた【根源的経験としての知覚野への還帰…】(第4章第3節中の一項目)が『知覚の現象学』序論においてどのように構想されたかを見たところで筆をおこう。「統合」や「構造」理解、そして彼の「現象学の構想」が『知覚の現象学』の本論で、またその後においてどのように展開されたのかについては、さらに検討を要する。

(2002.10.1)

註

- (1) Merleau-Ponty, “La structure du complotement”, puf., 1942.邦訳『行動の構造』, みすず書房, 滝浦静雄, 木田元訳, 昭和39年。同書からの引用の際に, その文ないし語句の最後に(J**/F**)という形で, それぞれ邦訳と仏語原文の頁を示す(書名を明記する必要があるときは前に“SC.”という略語を添えて示す)。章, 節の区切りは, すべて邦訳にしたがった。節以下の区切りは「項」および「段落」と表記した。なお, 小論の文脈などの関係で訳語が若干異なる箇所がある。また, 引用における下線は小論の著者, イタリックは原文によるものである。
- (2) Merleau-Ponty, “Phénoménologie de la perception”, Gallimard, 1945.
邦訳『知覚の現象学』I, II, みすず書房, 竹内芳郎, 小木貞孝訳。同書からの引用は(1)の場合と同様に行う(邦訳頁数はすべてIの頁数である。また, 必要な場合, 書名は“PP.”という略号によって示す)。
- (3)『新しい超越論的哲学へ向かって』: Theodore F. Geraets, “Vers une nouvelle philosophie transcendantale”, Martinus Nijhoff, 1971. PP28-31, PP130-150.
- (4) Première année, no2, 15 janvier 1939
- (5) loc. cit. PP130-134
- (6) なお, ポール・リクールは『メルロ=ポンティを讀んで』の中で, 『行動の構造』の『知覚の現象学』にたいする独自の重要性を認めているが, その関係について立ち入ってはいない。Paul Ricoeur, “Hommage à Merleau-Ponty (1961)” in “Lectures 2” (1992, Seuil).
- (7) 細部については, 拙論「メルロ=ポンティの『行動の構造』における「意識」の多義性と「統合」について」(山形大学紀要(人文科学)第15巻第1号, 平成14年)を参照。
- (8) 上掲拙論§5参照。
- (9) この対応については上掲拙論§7参照。
- (10) 上掲拙論の§4および同注(12)を参照。
- (11) この書名は235頁(邦訳324頁)での「動機づけ」という用語の注の中にみられる。
- (12) メルロ=ポンティが批判主義を採用しない理由については, 原文239-240頁, 邦訳331-332頁にまとめられている。
- (13) Edmund Husserl, “Ideen zu einer reinen Phänomenologie und Phänomenologischen Philosophie”, Erstes Buch, Martinus Nijhoff, § 50, § 85, 86.邦訳『イデーン』I-IおよびI-II(みすず書房, 渡邊二郎訳)。なお, 両者の「現象学的還元」の立ち入った比較は他日に期する。
- (14) Geraets, loc. cit. P182.

The Return to Phenomena in Merleau-Ponty ——From “the Structure of Behavior” to the introduction of “Phenomenology of Perception”——

Masahisa OGUMA

The theme of this paper is to understand the relations of Merleau-Ponty's two major works, “the Structure of Behavior” (SB.,1938(completion)) and “Phenomonology of Perception” (PP.,1945). According to Geraets' interpretation, after his completion of SB., the new vistas opened by the reading of Husserl challenged Merleau-Ponty and beckoned him onward. But I think his interpretation did not sufficiently regard the circumstances that in the PP. Merleau-Ponty preserved the fundamental thought of SB. and that not only Husserl's works but also this thought determined his understanding of phenomenology and human body deeply.

I show this in the following order.

- 1 . Exposition of the fundamental thought of SB. (the concepts of ‘integration’ and ‘structure’).
- 2 . Merleau-Ponty's considerations on methodology in the end of SB.
- 3 . His understanding of ‘sensation’ and ‘meaning’ in the “introduction” of PP.
- 4 . His understanding of the field of Phenomena and phenomenology in the “introduction” of PP.